

野崎観音



三 門

野崎観音は、正式名「福聚山 慈眼寺」という曹洞宗の寺院で、本尊は十一面観音菩薩（江戸時代）です。

毎年、5月1日から8日まで無縁経法要が行われますが、この期間、参道に出店が立ち並び「ようかび」といわれ、たいへん多くの人でにぎわっています。これは江戸時代に庶民の娯楽であった「野崎まいり」が起源で、人形浄瑠璃、歌舞伎、落語などの作品に取り上げられました。また、昭和初期、東海林太郎の「野崎小唄」が大ヒットし全国的に知られています。



野崎まいり（河内名所図会）



本 堂

慈眼寺の歴史

～僧・行基による創建伝説～

今から1300年程前、僧・行基が観音様のお姿を彫り、当地に安置されたのが当寺のはじまりといわれています。

～江口の君による再興～

平安時代の中頃、病を患った江口の君が奈良・長谷寺の観音にお祈りしたところ、大東の地にあった十一面観音像を礼拝するように告げられました。このお告げに従い、野崎の観音像に7昼夜お祈りをしたところ病が治ったので、ここに広大な伽藍を建て、当寺の再興がかなったと伝えられています。

～青巖らの復興～

また、当寺は戦国時代の戦火によって、殆どの建物が灰塵に帰しましたが、江戸時代の初めに曹洞宗の僧侶・青巖が開祖となり復興を始めました。以後、歴代住職が伽藍の復興を進める中で、特に大きな実績を残したのは、4世嶺南と5世大真です。



江口の君像



嶺南和尚像



大真和尚像



本尊十一面観音像

野崎まいりの流行

「野崎まいり」とは、旧暦4月1日から8日まで行われる無縁経法要への参詣を指します。江戸時代、戦乱が収まり治安が良くなると生活水準も向上し、余暇をとれるようになると近隣への日帰りの行楽も盛んになりました。

野崎観音は水路で殆ど歩かずに行くことができるうえ、5世大真は無縁経法要を営み、秘仏の十一面観音像を開帳し、これを大々的に宣伝したことにより、次第に「野崎まいり」として定着し、盛んになっていきました。



専應寺太子堂

野崎まいりの行程

八軒家浜（現在の天神橋付近）から船で寝屋川を上り、角堂浜（現在の住道駅付近）で下船し。そこから歩く場合と観音浜まで田舟に乗り換えて行く場合とがありました。また、寝屋川沿い（古堤街道）を陸路で参詣する人もいました。

陸路と水路とはほぼ並行して行っていたので、「ふり売り喧嘩」とよばれる互いににぎやかに罵り合いながら進む様子もよく見られたようです。

野崎観音へは、観音浜から専應寺の太子堂に参り、太子堂脇の小路を通り、慈眼寺の三門（楼門）から参詣していたとされています。



住吉神社（角堂浜）



観音浜（野崎駅南）



八軒家浜（天神橋付近）

お染久松物語

大坂東堀瓦屋橋にある油問屋の1人娘お染は、店の丁稚久松と恋に落ち、やがて2人は心中と遂げます。この悲恋の物語は、実際の心中事件をモデルにして「お染久松もの」として人形浄瑠璃や歌舞伎に脚色された「心中鬼門角」（きもんのかど）や紀快音「たもと（たもと）の白紋り」など多くの作品が上演され、それに伴い多くの浮世絵も作成されました。

1780年初演の近松半二「新版歌祭文」では、お染が「野崎まいり」と偽って、久松のいる野崎村を訪れる「野崎村の段」が描かれています。こうしたお染・久松と野崎観音との関わりは、当時の野崎まいりの流行が舞台設定の要因になったと考えられます。

慈眼寺には、お染・久松の塚があり、羽曳野市の野中寺には2人の墓所があります。



お染・久松の塚



お染・久松の墓所
(羽曳野市野中寺)



お染久松
(大東八景はがきより)



野崎まいりの様子はマンホールのふたにもデザインとして取り入れられています

お寺の詳細は、野崎観音ホームページへ（前ページにリンク入口有）
写真は、大東市立歴史民俗資料館 平成21年度特別展図録より引用